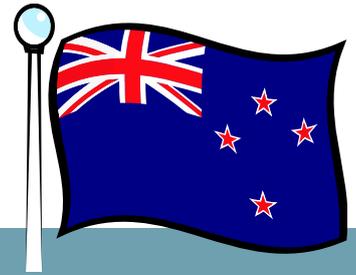


オセアニア[NZ]



1 農・畜産業の概況

ニュージーランド（NZ）は、温暖な気候と肥沃な土壌に恵まれ、国土面積（2680万ヘクタール）のうち、5割を超える1460万ヘクタールが農地となっている農業立国である。

一方、農業（林業、水産業を除く）が実質国内総生産（GDP）や就業人口に占める割合はいずれも1割にも満たない。しかしながら、人口が約440万人と国内の市場規模が小さいため、NZの農業は貿易に依存した構造となっており、総輸出額（FOB）に占める農産物の割合は5割を超え、外貨獲得上、重要な地位を占めている。

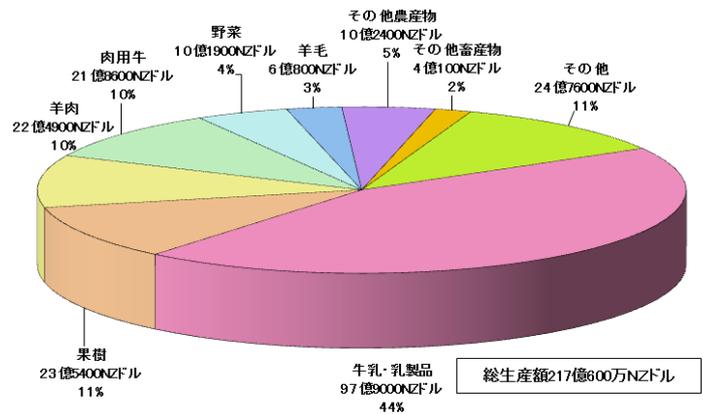
畜産部門は、農業粗生産額の約2/3、農産物輸出額の約8割を占めている。特に酪農・乳業は、農業粗生産額の4割以上、農産物輸出額の5割（総輸出額では1/4以上）を占め、農業において極めて重要な役割を担っている。

2011/12年度（4月～翌3月）の農業粗生産額は、前年度から3.1%増加し、217億600万NZドル（推計）となった（図1）。国際価格の上昇に伴い、羊肉部門が22億4900NZドル（同11.9%増）、羊毛部門が6億800NZドル（同29.6%増）と増加し、全体の増加に貢献した。一方、酪農部門は97億9000NZドル（同0.3%減）と前年度並み、肉用牛部門は21億8600NZドル（同3.4%増）とやや増加するにとどまった。

2011/12年度（7月～翌6月）の農産物輸出額（FOB）は、前年度比2.8%増の249億2600万NZドルとなった（図2）。畜産部門は、中国やアジアからの堅調な需要を背景に、輸出はおおむね好調である。同

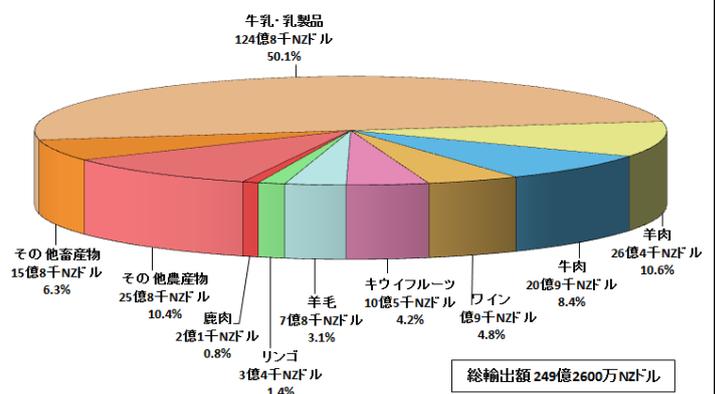
年度の品目別輸出額を見ると、牛乳・乳製品は124億8000万NZドル（同3.5%増）、羊肉（ラム・マトン）が26億3930万NZドル（同9.3%減）、牛肉（子牛肉含む）が20億9050万NZドル（同2.7%増）、羊毛が7億7630万NZドル（同8.3%増）となった。

図1 農業粗生産額(2011/12年度)



資料：MPI「Situation and Outlook For Primary Industries 2013」
注1：年度は4月～翌3月

図2 農産物総輸出額(2011/12年度)



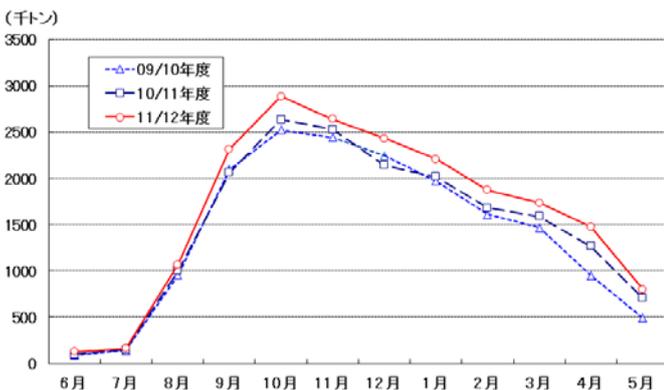
資料：Beef + Lamb NZ「Compendium of New Zealand Farm Facts (37th edition April 2013)」
注：年度は7月～翌6月

2 畜産の動向

(1) 酪農・乳業

NZの酪農は、温暖で降雨に恵まれた自然条件を生かし、草地を最大限に利用した放牧中心の飼養形態である。このため、年間の生乳生産は、牧草の生育状況と密接に連動しており、初春となる8月から搾(さく)乳を開始し、10月から12月の初夏をピークにその後次第に減少、5月頃にはシーズンを終えるという、明確な季節型生産体系を示している(図3)。生乳生産の中心となる9月から翌2月の6カ月間で、年間の約3/4を生産する。

図3 生乳生産量の推移



資料：Dairy Companies Association of New Zealand

注：年度は6月～翌5月

NZでは、粗飼料(放牧)に依存した生産体系により、生乳生産のコストは、世界的に見て最も低い水準にある。生産量の95%が輸出に仕向けられる乳製品は、NZの総輸出額の1/4程度を占めており、酪農・乳業部門は、NZの基幹産業の一つとして位置付けられている。

NZの生乳生産量は、全世界の3%を占めるに過ぎないが、世界最大の乳製品輸出国である。特にバターおよび全粉乳の国際市場でのシェアは、5割を超える。

国内市場の規模が小さいため、生乳生産者価格や乳製品価格は、いずれも国際市場の影響を強く受けざるを得ない状況にある。

① 主要な政策

酪農・乳業に対する国内の価格支持政策は存在しないが、2001年9月まで、ニュージーランド・デイリーボード(NZDB)が、乳製品の一元的輸出機能を持っていた。しかし、同年10月、2大酪農協とNZDBの販売機能を取り込んだ巨大酪農協(乳業メーカー)フォンテラが誕生し、酪農産業の再編が行われた。

フォンテラの誕生と同時に2001年、生乳および乳製品市場での競争を促進することを目的とした酪農産業再編法(Dairy Industry Restructuring Act 2001)が成立した。同法には、フォンテラの寡占による弊害を回避するため、乳業メーカーの新規参入の機会付与が盛り込まれている。このため、2011年現在、フォンテラには年間60万キロリットルを上限として、他社に生乳を供給することが義務付けられている。

② 生乳の生産動向

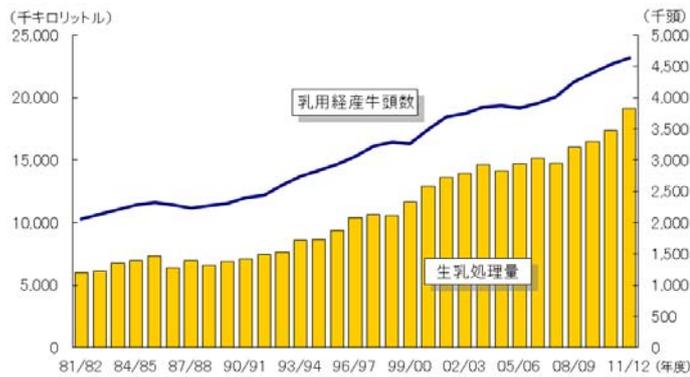
経産牛の飼養頭数は、酪農産業再編や、国際的な乳製品需要増加を背景に、増加基調で推移している(図4)。また、羊・肉用牛部門から、収益性に勝る酪農部門へと、転換が進んでいることも、増加の要因となっている。

近年では、特に、南島での頭数拡大が著しい。NZの酪農は、降水量に恵まれた北島のワイカト地域などを中心に行われてきた。しかし、乳製品の国際価格の高騰を契機に、南島のカンタベリー地域などで、かんがい施設が整備され、南島での酪農がさかんになった。

2011/12年度（6月～翌5月）の経産牛飼養頭数は、463万4000頭（前年度比2.3%増）で、うち北島は291万4000頭（同0.3%増）と、わずかな増加にとどまる一方、南島は172万1000頭（同6.0%増）と、かなりの程度増加した（表1）。

1頭当たり乳量も、補助飼料の給与量の増加により、増加傾向にある。飼養頭数の拡大や1頭当たり乳量の増加から、生乳生産も右肩上がりの推移となっている（図4）。2011/12年度1頭当たり乳量は4,128リットル（同7.8%増）、生乳生産量は1974万2000キロリットル（同10.3%増）となった。

図4 乳用経産牛飼養頭数と生乳処理量の推移

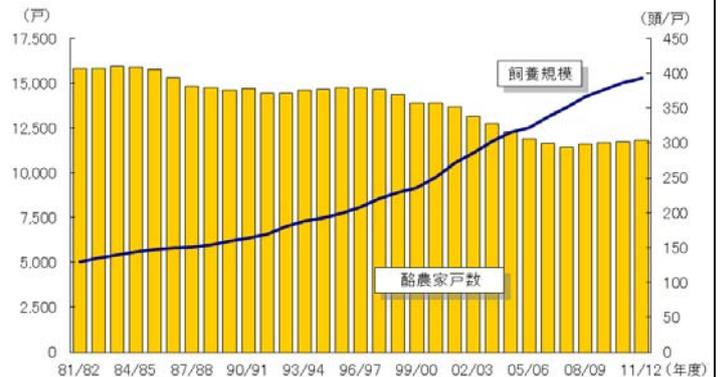


資料：Livestock Improvement「Dairy Statistics」
 注1：年度は6月～翌5月
 注2：乳用経産牛頭数は12月末時点

酪農家戸数は、農地価格の上昇などから新規参入が減少したため、NZ全体では減少傾向で推移していたが、2007/08年度に下げ止まり、2011/12年度は、1万1798戸（前年度比0.5%増）と、わずかながら3年連続で前年度を上回っている。

一方、1戸当たりの経産牛飼養頭数は、規模の拡大により一貫して増加傾向にあり、2011/12年度は、393頭（同1.8%増）となった。500頭以上を飼養する経営が全体に占める割合は、前年度から1.6ポイント増の49.3%、1000頭以上を飼養する経営が全体に占める割合は、同0.8ポイント増の13.8%となった。

図5 酪農家戸数と飼養規模の推移



資料：Livestock Improvement「Dairy Statistics」

表1 地域別の飼養戸数・頭数・規模の推移

地域/区分・年度	飼養頭数(千頭)					飼養戸数(戸)					飼養規模(頭/戸)				
	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12
北島	2,757	2,821	2,862	2,906	2,914	9,050	8,998	8,973	8,947	8,912	305	314	319	325	327
南島	1,256	1,432	1,535	1,623	1,721	2,386	2,620	2,718	2,788	2,886	526	546	565	582	596
NZ合計	4,013	4,253	4,397	4,529	4,634	11,436	11,618	11,691	11,735	11,798	351	366	376	386	393

資料：Livestock Improvement「Dairy Statistics」
 注1：年度は6月～翌5月
 注2：12月末時点
 注3：頭数は当該シーズンに搾乳された乳用牛頭数

③ 牛乳・乳製品の需給動向

NZの乳製品生産は、かつて、法律に基づき輸出を一元管理するNZDBの市場戦略により調整されていたが、フォンテラの設立に際し、輸出が自由化された。しかしながら、同国でのフォンテラの乳製品生産のシェアは、依然として約9割を占める。

輸出相手国は、フォンテラの企業戦略と相まって、北米、EU地域、アジアや中南米など世界140カ国となっている。フォンテラは、2002年に世界的な大手食品メーカー「ネスレ」と合併企業を設立した。2003年1月からは、中南米の市場での乳製品製造・販売を手がけ、また2007年には、中国で牧場を建設し生乳生産を行うなど、国際市場への積極的な進出を図っている。

2011/12年度（7月～翌6月）の乳製品輸出量は、生乳生産の増加および中国などアジア諸国の堅調な需要を背景に、おおむね前年を上回った。品目別では、バターが前年度比12.2%増の44万2000トン、チーズは同10.7%増の27万4900トン、全粉乳は同5.4%増の112万5500トン、脱脂粉乳は前年度並みの34万8600トンとなった（表2）。

表2 生乳生産量および乳製品輸出量の推移

(単位:千頭、千トン)

区分/年度	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12	
経産牛頭数	4,013	4,253	4,397	4,529	4,634	
生乳生産量	14,745	16,044	16,483	17,339	19,129	
輸出量	バター	240	243	247	394	442
	チーズ	274	271	279	248	275
	全粉乳	634	683	903	1,068	1,126
	脱脂粉乳	252	330	384	349	349

資料：Livestock Improvement「Dairy Statistics」、Statistics New Zealand

注1：経産牛頭数は各年度12月末時点

注2：乳製品輸出量は7月～翌6月

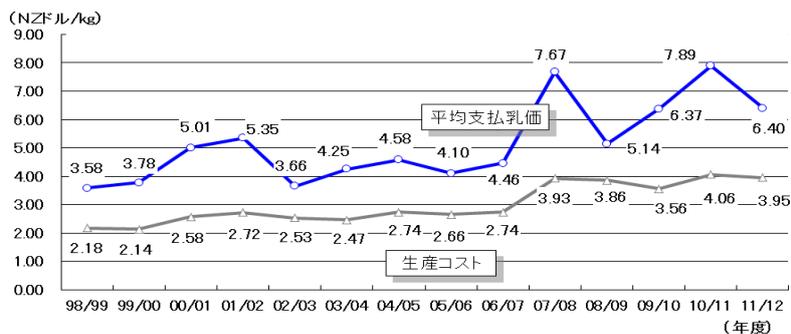
③ 乳価の動向

生乳生産者価格（平均支払乳価）は、乳製品の国際相場や為替相場（NZドル）の動向などに左右される。

2011/12年度（6月～翌5月）の乳固形分1キログラム当たりの価格は、国際乳製品価格が軟調であったことなどから、前年度比18.9%安の6.40NZドルと大幅に下落した（図6）。

一方、2011/12年度の生産コストは、ほぼ前年並みの1キログラム当たり3.95NZドルとなった。放牧中心の低コスト酪農を特徴としてきたNZであるが、2007/08年度の乳価上昇を契機に、補助飼料の投入やかんがい設備への投資などから、コスト水準は上昇しており、その後は横ばいとなっている。

図6 生産コストと平均支払乳価の推移(乳固形分ベース)



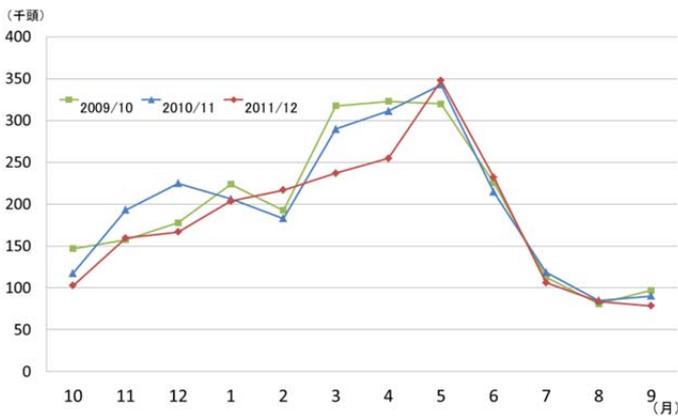
資料：Dexcel「Economic Survey of New Zealand Dairy Farmers」、Livestock Improvement「Dairy Statistics」

(2) 肉牛・牛肉産業

NZの肉用牛生産は、草地に依存した生産体系となっており、フィードロットでの穀物肥育による生産は、ごくわずかである。

牛肉生産は、生乳生産と密接に連動している。年度（9月～翌8月）各月の成牛と畜頭数の推移を見ると、生乳生産が終了する5月にピークを迎える。これは、牧草が減少する冬期を迎える前に、乳廃牛の出荷が増加するためである。その後、と畜頭数は春先にかけて大きく減少し、8月から9月にかけての成牛と畜頭数は、ピーク時である5月の1/3程度にまで減少する（図7）。

図7 成牛と畜頭数の推移



資料：StatisticsNZ

肉用牛として飼養される牛の1/3程度は、乳用種または乳用種と肉用種の交雑種となっている。

また、酪農部門から供給される乳用種の雄牛は、子牛肉として出荷されるものが多いが、残りは去勢しないまま飼養され、乳用経産牛と同様に加工用牛肉（ひき材用途）として、NZ最大の輸出市場である米国を中心に輸出されている。このことから、肉用牛供給という面でも、酪農部門は、牛肉生産にとって重要な役割を担っている。

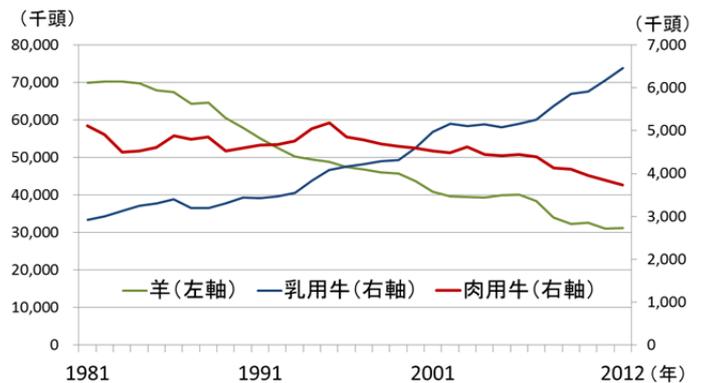
NZの牛肉産業は、国内の市場規模が小さいことから、酪農産業と同様に輸出依存度が高く、生産された牛肉のうち、金額ベースでおよそ8割程度が輸出に向けられている。このため、肉用牛生産は、価格面などで、国際市場の影響を強く受けている。

① 肉用牛の生産動向

長期的な肉用牛の飼養頭数の推移を見ると、収益性の悪化による経営規模縮小や、酪農、養鹿、林業など、より収益性の高い部門への転換などが背景となり、1995年の518万頭をピークに右肩下がりとなっている（図8）。また、1997/98年度および1998/99年度には、東部を中心とする干ばつが続き、早期出荷や繁殖牛のとう汰も進んだ。

肉用牛の飼養頭数は、2000年に乳用牛と逆転した。2007年以降、乳製品価格の高騰から乳用牛の飼養頭数は急増し、肉用牛は、酪農業への土地利用の転換により、減少傾向が強まっている。

図8 主要家畜の飼養頭数の推移



資料：StatisticsNZ

2012年6月末時点の肉用牛飼養頭数は、前年から引き続き減少して373万4000頭（前年同期比2.9%減）、うち繁殖雌牛は前年からわずかに増加し、106万頭（同0.7%増）となった（表3）。飼養頭数の減少は、前

述の酪農業への転換が影響したほか、前年まで干ばつが数年続いた北島で、2010年春（9～10月頃）の出生頭数が減少したことも要因となっている。

表3 牛飼養頭数の推移

(単位:千頭)

区分/年	2008	2009	2010	2011	2012
肉用牛	4,137	4,101	3,949	3,846	3,734
うち繁殖雌牛	1,104	1,096	1,118	1,053	1,060

資料：Meat & Wool NZ「Annual Report」(2008年)、Beef + lamb NZ「Annual Report」(2009～2010年)、Beef + lamb NZ「Stock Number Survey As At 30 June 2013」(2011～2012年)

注2：各年、6月末時点
注3：2012年は暫定値

② 牛肉の需給動向

ア 牛と畜頭数および牛肉生産量

牛肉生産量の長期的な推移を見ると、飼養頭数の増減や気象条件に合わせて変動するものの、おおむね50万～60万トンの間で推移している。

最近では、2008/09年度に、干ばつによる早期出荷や、乳価の下落によって乳用経産牛のとう汰が増えたことから、と畜頭数および牛肉生産量は増加したが、その後は、減少傾向で推移している。

2011/12年度の成牛と畜頭数は219万2000頭(前年度比7.9%減)、牛肉生産量は57万5000トン(同3.5%減)と、いずれも前年度から減少した。同年度は、前年まで続いた干ばつが終了して良好なシーズンとなり、冬期に給与される牧草や補助飼料が豊富にあったことから、例年よりも多くの乳用繁殖雌牛が次年度に持ち越され、経産牛のと畜頭数が減少した。また、前年までの出生頭数の減少により、去勢牛のと畜頭数も減少した。

イ 牛肉輸出

牛肉輸出量は35万574トン(前年度比1.7%減)と、成牛と畜頭数や牛肉生産量の減少にもかかわらず、わずかな減少にとどまった(表4)。これは、同年度の牛肉輸出用にと畜された成牛のうち、雌牛の占める割合が減少したことや、良好な飼養環境を反映し、去勢牛や雄牛などの平均枝肉重量が増加したことによるものである。

輸出先を見ると、米国など北米市場向けは17万6000トンと、輸出量全体の約半数を占め、次いで、日本や韓国など北アジア市場向けが、9万トンと1/4を占めた。最大の輸出市場である米国向けは、大半が加工用牛肉となっている。

表4 牛肉需給の推移

(単位:千頭、千トン)

区分/年度	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12
成牛と畜頭数	2,367	2,431	2,376	2,381	2,192
子牛と畜頭数	1,507	1,421	1,552	1,656	1,695
牛肉生産量	610	612	610	596	575
子牛肉生産量	25	25	25	27	28
牛肉輸出量	363	364	366	357	351

資料：2008年以前がMeat & Wool NZ、2009年以降がBeef + lamb NZ「Annual Report」

注1：年度は10月～翌9月

注2：生産量は枝肉重量ベース、輸出量は船積重量ベース

③ 肉用牛価格の動向

NZでは、生産された牛肉のうち約8割（枝肉重量ベース）が輸出に仕向けられることから、同国の肉用牛価格は、輸出先の経済状況や、主要決済通貨である米ドルや英国ポンド、ユーロに対するNZドル為替、また、最大の輸出市場である米国国内の牛肉生産や価格の動向に左右される。

2012年に入り、米国では、干ばつによる肉牛飼養頭数の減少や飼料穀物価格上昇による生産コスト高から、国内の牛肉価格が高騰した。これを受け、米国向けの大半を占める加工用肉用牛（雄牛：270～295キログラム）の2011/12年度の平均価格は、1キログラム当たり419NZセント（前年度比2.2%高）と上昇した。

一方で、高品質牛肉向け肉用牛の平均価格（去勢・未經産牛：270～295キログラム）は、NZドル高による輸出市場での価格競争力低下から、同414NZセント（同1.2%安）と下落した。NZドルは、2009年半ばから主要通貨に対して高値で推移しており、2011/12年度には、1NZドル当たり0.81米ドル（同2.5%高）と、1985年3月に変動相場制となって以来、最も高い水準となった。

また、2011/12年度の高品質牛肉価格は、肉用牛価格の下落を受け、キログラム当たり406NZセント（同0.5%安）と、わずかながら下落した。

表5 NZの牛肉価格の推移

(単位: NZセント/キログラム)

区分/年度	07/08	08/09	09/10	10/11	11/12
高品質牛肉価格	333	370	335	408	406

資料：第一次産業省(MPI)「Situation and Outlook for New Zealand Primary Industries」

注1：7月～翌6月

注2：NZの牛肉価格は、輸出価格や為替の影響を受けて変動するため、参考として掲載